

Bookstart Newsletter



2019
冬
No.63

ブックスタート・ニュースレター



兵庫県川西市

特集

家庭訪問で行うブックスタート

～育児不安の軽減へ絵本が果たす役割とは～

ブックスタートを実施している多くの自治体では、集団健診で事業を行っているですが、中には乳児のいるすべての家庭を専門職員などが訪問する「こんにちは赤ちゃん事業（以下、赤ちゃん訪問）」などの機会に実施している自治体もあります。

赤ちゃん訪問は、生後4か月児までを対象とした事業です。早い場合は2か月の赤ちゃんの家庭を訪れるため、絵本を読みみかせた時の赤ちゃんの反応が少しわかりにくかったり、保護者が絵本を育児に取り入れる気持ちの余裕がなかったり、あるいは訪問自体を受け入れてもらえないなど、ブックスタートを行うことが難しい場合もあるようです。

しかし、親子の状況にきめ細かく対応することで、「子育ての孤立化を防ぐために、その居宅において様々な不安や悩みを聞き、子育て支援に関する必要な情報提供を行う」（厚生労働省 乳児家庭全戸訪問事業ガイドラインより）という赤ちゃん訪問の目的を達成するために、ブックスタートを効果的に活用することができます。

今回は、赤ちゃん訪問でブックスタートを実施する兵庫県川西市の事例から、絵本が育児不安の軽減や、さらには虐待予防のツールの一つとして機能する可能性を探ります。

ケーススタディ
兵庫県川西市

すべての親子と出会うために
何度でも出向く

年間出生数約1000人の川西市では、こども未来部に所属する専門の訪問員2人が、0歳児のいるすべての家庭を訪れ、保護者と育児に関する様々な話をする中でブックスタートも行っています。

親子に直接会うことは、実はそう簡単ではありません。時には何度訪ねても不在だったり、家の中に人の気配はするのに応答がないこともあります。そうした場合も訪問員は、保健師とも連携しながら、親子と会える機会を模索します。

親子へのアプローチの流れ

◎ 生後1か月
事業案内と、訪問日時の希望を聞き返信用封筒を送付。返信のある家庭は全体の5割弱。返信のない家庭には、アポイントを取らずに訪問する。

◎ 訪問時
インターフォンを押しても応答がない場合は、赤ちゃん訪問について説明した手紙をポストに投函。その後、会えるまで何度か訪問する。

◎ 4か月・10か月児健診にも
さらに訪問を重ね、会える機会を模索。保健師とも連絡を取り合い、必要であれば、4か月・10か月児健診にも出向く。

保護者への敬意や
ねぎらいの気持ちを言葉に込めて

赤ちゃん訪問では、発達確認のほか、夜泣きなどの保護者の困りごとにも、一つひとつ丁寧に耳を傾けます。そして例えば、保護者から「泣いている時には、とりあえずおもちゃなどを次々に与えてみるのだけだ……」という話が出れば、「色々なものを試してみるなんて、お母さんの工夫はすごい！」と、保護者の頑張りを受け止めます。我が子を思い、日々の子育てに奮闘する保護者に対する、敬意やねぎらいの気持ちがある言葉には込められています。

話が一段落したところで、持参した絵本を赤ちゃんに開き、「わんわんがいるね〜」など、優しく語りか



訪問は、家の中に入って話をしたり玄関先での立ち話になったりするなど、様々な状況で行います。しかしどんな時でも親子の気持ちやニーズを最優先にしなが、会話を進めます。

絵本が虐待予防につながる
のはなぜか

川西市では赤ちゃん訪問の目的を、虐待予防や子育て不安の解消と定めています。そうした事業において、絵本が読みかかせたことがないという保護者もいますが、そんな時には「絵本と赤ちゃんを見ながら、頭に浮かんだ言葉をお話してみただけでいいよ。読み方にルールはないからね」と話すなど、絵本が赤ちゃんとのコミュニケーションに役立つ、気軽なツールであることを伝えます。

川西市では赤ちゃん訪問の目的を、虐待予防や子育て不安の解消と定めています。そうした事業において、絵本が読みかかせたことがないという保護者もいますが、そんな時には「絵本と赤ちゃんを見ながら、頭に浮かんだ言葉をお話してみただけでいいよ。読み方にルールはないからね」と話すなど、絵本が赤ちゃんとのコミュニケーションに役立つ、気軽なツールであることを伝えます。

絵本を読みかかせる時、訪問員は赤ちゃんの様子にも目を配ります。そして、「よく見ているね」「耳を澄まして聞いているみたい」など、赤ちゃんの小さな反応を愛おしみながら、言葉を添えます。赤ちゃんといつも一緒にいる保護者にとって、我が子のわずかな変化を意識する機会が、意外と少ないのかもしれない。でも、第三者から伝えられることで、

絵本を読みかかせる時、訪問員は赤ちゃんの様子にも目を配ります。そして、「よく見ているね」「耳を澄まして聞いているみたい」など、赤ちゃんの小さな反応を愛おしみながら、言葉を添えます。赤ちゃんといつも一緒にいる保護者にとって、我が子のわずかな変化を意識する機会が、意外と少ないのかもしれない。でも、第三者から伝えられることで、

赤ちゃんが順調に成長していることを実感し、安心できるようです。

また、絵本を読む時の保護者は、自然と穏やかな表情になります。実はそのことを保護者自身は気づいていない場合があります。そこで訪問員は「お母さん、今、とてもいい表情をしていたね。絵本を開くとそうなるよね」と、さりげなく伝えます。

赤ちゃんとの暮らしの中では度々、泣いている我が子を懸命にあやしても泣き止まないなど、苦しく感じる場面があります。「なんで泣くの？もう、どうしたらいいかわからない」と気持ちに余裕がなくなり、思わず声を荒立ててしまうこともあるかもしれません。虐待に陥る保護者の背景には、そうした日々の葛藤があるといえます。

訪問員は、そんな時に保護者が冷静になれるよう、絵本を一つのツールにしてほしいと考えています。赤ちゃん訪問で絵本を開いた時、保護者がいつか思い出してくれたら……。「そうだ、私ってあの時の表情ができるんだったな」と絵本を手にとったり、読んでいるうちに「あ、

じつと見てる」と、我が子の反応に気づいたり、さらには、保護者自身が幼い頃に体験した、絵本を介した幸せな時間がふとよみがえったりするかもしれません。それは保護者の中で、赤ちゃんと上手に付き合っていく方法の一つが見つかったことになり、そうした経験の積み重ねが保護者を元気づけ、「毎日しんどいけど、なんとかなるわ」と、気持ちを前向きに切り替えるための助けにもなり得るのです。

保護者に安心感と勇気を届ける
支援を目指して

「支援」とは、子育てを際限なく一緒にやってあげることではなく、赤ちゃんが健やかに成長するために、保護者が自信を持って育児に取り組めるようサポートすることです。

だからこそ訪問員は、「あなたの子育ては間違っていないよ。やり方は他にもあるかもしれないけれど、今はこれで大丈夫だからね」というメッセージを届け、保護者に安心感と勇気を持ってもらえるよう、赤ちゃんとその家族に何度でも会いに行くのです。

VOICE



こども未来部
こども・若者ステーション
利用者支援専門員
森下 日出子さん

1回目の訪問ではあえてブックスタートを行わないことも

本市では、赤ちゃん訪問の目的を達成するための一つの手段として、ブックスタートを捉えています。ですから、親子の状況によって「絵本よりもまずは子育て支援の資料だけを渡した方がいい」「今日はじっくり話を聴くだけの方がいい」と感じたら、初めて会った時にはあえてブックスタートを行わず、改めて訪問することになります。そして次回以降に折を見て、絵本を読んで手渡しています。

家庭訪問でのブックスタートは、親子の様子をつぶさに把握できるため、一人として同じやり方にはなりません。それぞれの赤ちゃん、保護者に寄り添った方法で行うことを、何よりも大切にしているからです。

親と子の関わりは、人と人との関わりでもあります。赤ちゃんがこの世に生まれて、最初の人との関わりを、無条件に信頼できるお母さんやお父さんと大切に紡いでほしい。そして保護者にも、我が子であっても、一人の尊厳を持った人として関わってほしいと願い、日々親子に接しています。

おわりに

家庭訪問でブックスタートを実施しているのは、全体の5%ほど（NPOブックスタート調べ）。本紙で家庭訪問を取り上げることも初めてでした。「二人として同じやり方にはならない」という森下さんの言葉通り、一組一組の親子にきめ細やかな配慮

が必要となる難しさを実感する取材となりました。

一方で、親子により適した支援ができることにより、絵本が育児不安の軽減や、虐待予防のツールの一つになり得るといって、新たな可能性も感じることができました。

研 修 会 報 告



『2018年度ブックスタート研修会 in 三重』

11月13日、三重県総合文化センターにてブックスタート研修会を開催。図書館、母子保健担当課、子育て支援担当課の職員やボランティアなど、県内外から47名が集い、参加者どうしの活発な意見交換や交流が行われました。

スタッフブログでもご紹介しています！ブログのQRコード▶



午前

- ◆ ブックスタートの今 ~全国の実践から見えてきたこと (NPOブックスタート)
- ◆ 事例発表 いなべ市 / 多気町



事例発表



質疑応答



いなべ市の皆さん /

多気町の皆さん /

他の自治体の取り組みを知ることができ、とても勉強になりましたという声も。発表ありがとうございました！

午後

- ◆ ワークショップ「ブックスタートを語りあおう」

『ワールド・カフェ』という手法を使ってワークショップを開催。他市町との交流を通じ、事業の目的や意義を再確認しました。

ワールド・カフェの様子



会場にはお菓子も用意。カフェのような雰囲気の中で会話が弾みます。



グループで話し合い



話し合いの内容をメモ

左) 途中でメンバーを入れ替えながら、テーマに沿って話し合います。様々な地域や立場の人が実践経験や思いを交換し、新たな発見も。右) 机の模造紙は、時間の経過とともにメモでいっぱい。メンバーが入れ替わった時、それまで話し合った内容の共有に役立ちます。

参加者の感想 最後に全員が一つの輪になって、それぞれの気づきや感想を発表しました。

各地域で様々な機関の方が、世代を超えて一つの思いで活動していることに、熱いものを感じました。

他の人たちの悩みも聞かせてもらって、ちょっと心が軽くなりました。



「ブックスタート」で一日研修……と思っていました。が、あっという間の一日でした。

今日参加しなかったら、配付率100%だけを目指していたかもしれないと思う位、様々なことを学びました。

コトコト ことのは

スタッフが出合った言葉

「出産おめでとう。生まれてきてくれて嬉しいよ」と言っているようで、とても嬉しかったです。

ブックスタート参加後のアンケートに、こう書いてくれたお母さんがいました*。会場での、笑顔のお出迎えや自然に交わされる会話、ゆったり絵本を楽しむ時間。絵本を間においたり通して、赤ちゃんのご家族の幸せを願う気持ちが、たしかに伝わっていました。*『「ブックスタートがもたらすもの」に関する研究レポート』NPOブックスタート編著より